

(おかしいっ、ああ、いやだっ)

白く強烈な稲妻が身体を突き抜けるたびに、香奈は顎を突きだして天をあおいだ。これが快樂というものなのか？ 恐ろしい。恐ろしいのに気持ちいい。

(ああっ、またっ、きちやう！)

香奈がその絶大なエクスタシーの波に身構えようとしたとき、別の違和感に気づいた。まるで奈落に突き落とされるような衝撃だった。

「ああっ、そっ、そんなんっ」

城木がペニスを剥きだして股間にあてがっていたのだ。香奈は今まさに処女を破られようとする恐怖に戦慄した。

少女の見ている前で、亀頭が三分の二ほど埋まっていく。香奈は膣口の奥のなにかに、肉棒がぐいっと突き当たってくるのを感じていた。

「だめですっ、先生っ、だめえっ」

急激に手脚をばたつかせるが、鎖のせいでもならない。香奈は身体全体をくねらせ、腰をひねる。かぶりを振って異物の侵入を阻止しようと全力を振り絞る。だが抵抗して防げるものではない。

「力を抜け」

短くそう言われたが、そんなことはできようもない。香奈は尻を跳ねさせて踏ん張った。

「っ、ああっ、痛いっ。いたあああああいつ！」

普段の温厚な彼女からは想像もつかない叫び声があがる。粘膜を巻きこんで、男性器が沈んでいく。その接合部から愛液が泡立ち、血がポタポタとしたたつていく。城木は、そこから一気に腰を突きあげて根元まで胎内にねじこんだ。

「出してえっ。痛いっ、先生っ、いたあーいつ！」

香奈が顔をクシャクシャにして泣きわめく。ナースキャップから髪がほつれて顔を覆った。歯を食いしばり、涙をこぼしている。あまりに哀れな運命の転落に、彼女自身、涙がとまらない。

股間では血と愛液にまみれた肉棒が出入りしていた。太腿に飛び散った液が、ストッキングをとるところどこも赤く染めていた。

(こんなの、狂ってる)

セックス。それが、こんなに苦しいことだと思ってもみなかった。股を引き裂かれ、内臓をえぐられているとしか思えない。ここにきて、香奈は行為の恐ろしさを初めて実感した。

「ひどいっ。ひどい」

肉路の天井に到達したペニスは内臓を押し分けるように、ぐっと肉路を引き伸ばした。その激痛と衝撃に、紅潮しながら少女が訴える。

「処女だからな。痛いのは当たり前だ」

男はうなるように叫び一気にペースをあげていく。処女へのいたわりなどなかった。「助けてっ……誰か」

ポニーテールを振り乱していた香奈の視線が、ふいにある一点でとまった。視線の先に良太がいた。

「助けてやるか？」

城木が良太に声をかけた。

「……まさか」

良太が肩をすくめた。だが、目もとは笑っていないかった。それを見て城木はふっと笑う。

「たっぷり注いでやる」

「痛いっ、ああっ、いやっ」

処女にとってあまりに激しい責め苦に、終始、身悶える香奈。あまりの惨めさに香



奈は死んだほうがましだと思った。

「よしっ。お前の卵子を精子で貫いてやる」

香奈にとつては永遠とも思える長い責め苦の果て、城木はそう言うのと、えぐるように腰を突きあげた。

「んっ、っ、あああつ、灼けちゃう、灼けちゃう」

その瞬間、胎内に熱い液体が注がれた。穢けがされた、もう二度と元の身体に戻れない。熱い感覚に香奈は叫び声をあげるのが、精いっぱいだった。

接合部から白濁した液が逆流し飛び散る。そのまま、城木は二ラウンド目に突入したようだ。男は全身全霊をかけて、鮎沢香奈を犯す。

少年たちが見守るなか、医師はピストンを繰り返かえし、香奈の身体をぞんぶんに楽しんだ。

「うあっ」

どれぐらい経っただろうか、ふいに香奈の口から違ったトーンの声がもれはじめ。白濁液と破瓜はかの血が潤滑油となったのか、痛みとは違う感覚が子宮の奥から湧きあがってくる。

(っ、入り口が痛いのにっ、奥が痺れるっ)